九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『金瓶梅』成立年代考 : 呉晗氏「金瓶梅的著作時代及其社会背景」批判

日下, 翠
関西大学

https://hdl.handle.net/2324/16090

出版情報：東方. 34, pp.7-10, 1984-01. 東方書店
バージョン：
権利関係：

『金瓶梅』成立年代考

――呉晗氏「金瓶梅的著作時代及其社会背景」批判――

日下　翠

呉晗氏は論文「金瓶梅的著作時代及其社会背景」（『読史箚記』所収）において、『金瓶梅』の成立年代を、早くとも隆慶二年以後、遅くとも万暦三十四年までであろうと結論された。氏の論文は、『金瓶梅』の成立年代を、万暦年間とする有力な根拠の一つとなっている。しかし、実際には、氏のあげた根拠はどれ一つとして、確実な証拠とはならない。ここでは氏の論文を再検討することにより、『金瓶梅』万暦成立説批判への手がかりとしたい。

以下では呉晗氏の挙げた項目ごとに反論を試る。

一、太僕寺馬価銀

『金瓶梅詞話』（以下は大安影印本による）第七回に次のようなくだりが見られる。

〝婦人（孟玉楼）がいいました。「……緊急の時は天子様も、手もとにお金がないと、太僕寺から馬価銀を借りていらっしゃるではありませんか……。」〟

この太僕寺の馬価銀について、呉晗氏は、要約すると、以下の如く述べ、成立年代を推定しておられる。

朝廷が太僕寺から銀子を借用することは明代中葉以後の事である。明史巻九二兵志馬政には、「成化二年南土に馬を産せぬため銀を徴する。四年始めて太僕寺常盈庫を建て、馬価銀の貯備に用いた」とあり、さらに、「隆慶二年提督四夷館太常少卿武金が、太僕寺の種馬の売却を進言して受け入れられた。この時より太僕寺の馬価銀が飛躍的に増加した」ことがみえている。太僕寺の馬価銀は成化四年（一四六八年）より始まるが、極めて少額であった。隆慶二年以後、種馬を売ることにより藏銀が増加し、万暦元年（一五七三年）には四百余万両に達した。嘉靖の頃、宮中が借りうけたのは、光禄寺と太倉寺からのみであったと思われる。なぜなら当時、太僕寺はまだ多額の馬価銀を存しておらず、借用しなかった可能性があるからである。隆慶の中葉に、数度借りているが、万暦十年以降のように頻ぱんではない。

呉晗氏は以上の如く述べられ、『金瓶梅』の成立年代を万暦年代、少くとも隆慶二年以後であろうと断定しておられる。

しかし、谷光隆氏『明代馬政の研究』によれば、『世宗実録』巻四三嘉靖三年九月甲申の条に、〝太僕寺馬価十五万両。

大同、宣府、糧儲の欠乏を告ぐ。…官を遣し、購入して鎮城に分貯す。〃

とあり、さらに『世宗実録』巻二三〇、嘉靖十八年十月庚辰の条に、

〃太僕寺馬価銀三万両を宣府に発給す。修辺費と為す。兵科都給事中馮亮の議なり。〃

とある。つまり、成化、弘治の間には、本来の目的通り買馬の費用としてのみ充当された太僕銀は、太倉銀の恒常的窮乏によって、正徳以後、流用されることが生じ、嘉靖以降にはその額が増大していったのである。これでみるに、『金瓶梅』の馬価銀の件は、借用の慢性化した万暦より、むしろ臨時的であった嘉靖年間の事情を反映していると考える方が自然と思われる。孟玉楼の言葉には、臨時的な意味あいと、裏話めいた口調が感じられるからである。

二、仏教の盛衰と小令

『金瓶梅』全書は、仏教の因果応報でつらぬかれており、さらに呉月娘の仏教信仰のありさま等、仏教に関する叙述が多い。呉晗氏はこれを、仏教が栄えた万暦の時代を反映しているからであって、道教隆盛の嘉靖時代の作ではない証拠の一つとされている。仏教関係の事が多いのは確かで、西門慶の遺児孝哥も仏門に入って終る。しかし一方で、作品中に、道教に関する叙述が多いこともみのがすことはできない。第二十九回では道士の呉神仙が、妻妾たちの運命をぴたりといいあてる。このくだりの呉神仙の姿は多分に好意的に描かれており、第五十七回で、西門慶が薛尼をののしるくだり等、僧侶や尼の堕落を描いた部分と大きな対照を示している。さらに、西門慶の参廟の詳細な描写(第三十九回)、官哥の葬儀の折(第五十九回)や、李瓶児の葬式で行われる呉道士の法要の様子、黄真人の祈禱(第六十六回)、潘道士のおはらい(第六十二回)等、これらはすべて、日常生活と密着した道士、道教のありさまである。テーマとしての抽象的な因果応報よりも、日常に生きる道教の描写を考えるならば、これをもって、万暦時代の世相の描写と断定する事は不可能ではないだろうか。

次に呉晗氏は、『金瓶梅』中に、沈徳符が『野獲編』で述べた、万暦の流行歌、打棗竿と掛枝兒の二曲がみられぬことから、成立の下限を、『野獲編』より少し早い時期、即ち万暦三十四年としておられる。しかし、袁宏道は万暦二十二年蘇州の知事となり、二年その任にあったが、その当時すでに、董其昌あての手紙に、「『金瓶梅』はどこで得られたのですか、枚生の『七発』よりずっとすばらしいですね。」と書いているのである。下限が万暦三十四年よりはるかに溯ることはいうまでもない。ちなみに、『金瓶梅』中には、『清平山堂話本』、『雨窓欹枕集』、『宝剣記』、『詞林摘豔』等、嘉靖年間の作品からの引用が多くみられ、小令も山坡羊、鎖南枝など、嘉靖初期の流行歌が圧倒的に多い。嘉靖の時代を反映していることは疑いのない事実と思われる。

三、太監、皇荘、皇木、その他

(a)太監について

『金瓶梅』第三十一回に次のような話

がみられる。西門慶が宴を開く時に二人の宦官がやってくる。周守備は席を辞退する二人に、

〝お二人の太監さま（宦官のこと）は、お年もご人徳も尊いお方。ことわざにも、三年宦官をすれば、位は王公の上に居る。と申すではありませんか。上座にお着きになるべきです。とやかく申すことではございません。〟

という。呉晗氏は、これを宦官が勢力を得ていた万暦時代の情景であり、宦官の勢いが弱められていた嘉靖ではない証拠としておられる。しかし、その続きをみると、詞曲を注文して唱わせる場面で、二人の無知ぶりが嘲笑をさそう。そして宦官の一人は、

〝私ども内官のくらしは、天子様のご用を承るだけで、詞曲のあじわいなどわかりはしません。あの者たちの唱うにまかせましょう。〟

と、正直に、自分たちは天子の世話をするだけの無知で無学な存在であることを認める。むしろこれは宦官の勢力がおさえられていた嘉靖の時代の反映とみることができるのである。

(b)皇荘について

さらに、〝皇荘を管理している〟（第三十一回）とあるくだりをとりあげ、嘉靖の途中で、皇荘は官地と改称されたことから、嘉靖の作品なら皇荘の名称はないはずとしておられる。皇荘は、あと一箇所、第七十八回にも出てくるが、急に官地と改まった最新の名称を直ちに小説に使うとは考えられない。あくまでもこれは、宋代のこととして描かれているからである。

(c)皇木について

第三十四回に、劉百戸が皇木を流用して自宅を建て、罪にとわれる話が出てくる。呉晗氏は万暦十一年慈寧宮が、二十四年に乾清、坤寧の二宮が火災にあったことをあげ、皇木云々は、この時のことを指しているのであろうといっておられる。しかし、嘉靖二十年、廟の火災がおこり、工部侍郎の潘鑑、副都御史の戴金

中国版刻図録（影印）

北京図書館編

解説 京都大学人文科学研究所附属東洋学文献センター助教授 勝村哲也

B5判・上製箱入・八五〇頁・

定価二五、〇〇〇円

限定二〇〇部 残部僅少

※歴代の刻版の書籍、活字版の書籍、並びに版画を収めて詳細な解題を付した一大図録。中国出版史の全貌を図録をもって系統的に示す初めての仕事であり、中国図書館界の総力を挙げてなされたものである。

※本書は初版一九六〇年（限定三〇〇部一六〇元）と再版増訂本一九六一年（限定五〇〇部一八〇元）の二種あり、今次影印した底本は、その再版本である。

※本図録の編集の経過、初版と再版との異動内容、中国における善本等の探索活動等について、勝村哲也助教授の解説を付し、今次影印の意味を一層、明らかにした。

※原本の一帙八冊の線装本をB五判の洋装本に改めて机上の使用に便利なようにした。

朋友書店

〒606 京都市左京区吉田神楽岡町8番地
電話(075)761－1285 振替 京都11428

を遣わし、湖広四川に大木を採辦させた、との事が、『明史』巻八二食貨志六にあることは、呉晗氏もあげておられる。さらに、戴不凡氏は、「『金瓶梅』零札六題」（『小説見聞録』所収、一九八〇年）に於いて、『金瓶梅』に、

〃皇木の運搬を監督して、荆州へゆくのですが、途中ここを通りますので、お目にかかりにまいりました。〃（第五十一回）

とあるのをとりあげ、これは武宗のあとをついだ嘉靖帝が、実の父である興献王の墳墓（顕陵）を北京へ移す工事を敢行した時のことを反映したものであろう、としておられる。これでみても、皇木を採したのを万暦と限ることは不可能なのである。

(d)女番子について

第二十八回、陳経済は金蓮にこういう。

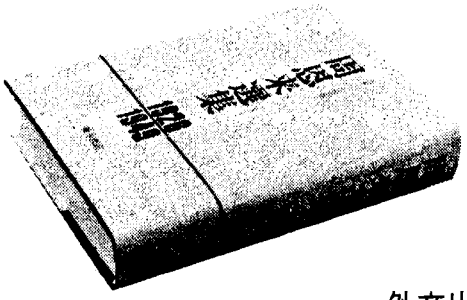
〃あなたは女の番子（盗賊等を捕える役人、とりて）のようですね。お手やわらかにおねがいします。〃

呉晗氏は、管理の徹底していた嘉靖時代には、番子（とりて）は放肆にできなかったはずであり、万暦以前ではありえない、といっておられるが、ことばの概念は一朝一夕にできるものではなく、又番子（とりて）が優しかったためしはない。番子は第九十五回に、平安が髪飾りを盗み出し、つかまるくだりにも出てくるが、罪人を捕える彼らが、いつの時代であろうと、恐れられなかったはずはないのである。

要するに、呉晗氏の説はどれ一つとして、確実な論拠となるものはない。少くとも呉晗氏のこの論文をもってして、『金瓶梅』万暦成立説の根拠とすることは不可能であり、逆に検討を加えるごとに、嘉靖時代を反映していると考えられるのである。

（関西大学）

周恩来選集 1926/1949



周恩来の革命の歩み——中国を知る
中華人民共和国成立以前の重要著作および発言60篇（うち40篇は未発表）を収録。
巻末に、関係人物、事件などについて523項目におよぶ詳細な原注・訳注を付す。

外文出版社版／B６／687頁／定価1,800円（〒300円）